法律相談 R40 44

# 目を瞑って数歩歩いてみよう

高橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「高橋・日浦法律事務所」代表。

平成27年4月、北海道有朋高等学校の跡地に北海道札幌視覚支援学校が開校した。もともとは、昭和18年3月5日に北海道立盲学校の設立が許可され（昭和25年4月に北海道札幌盲学校と改称）、札幌市中央区伏見4丁目にて開校したが、昭和49年4月に高等部を分離して同所に北海道高等盲学校として独立開校するとともに、そのほかの幼・小・中学部を江別市大麻元町に移転していたものを再度統合した。この結果、この地で幼稚部から高等部までの一貫した教育を行えることとなり、また、旭川、函館、帯広などの盲学校と連携し幼児児童生徒や保護者の方への教育的な支援などを行えることとなった、北海道の視覚障がい教育の拠点である。

ところが、北海道新聞の記事（平成27年6月6日朝刊）によれば、同学校の校舎玄関と校舎に隣接する寄宿舎玄関など合計3カ所に設置されている盲動鈴（もうどうれい）が発する「ピンポーン」という機械音に対して、「頭が痛い」とか「子どもが寝付けない」などという苦情があり、同学校では開校した翌月の5月初旬から、校舎側の盲動鈴を鳴らす時間帯につき、従前は来校する方々の便宜などを考えて朝から夕方までであったものを朝だけにし、また、寄宿舎側の盲動鈴を機械音から鳥の鳴き声に変更して対応したそうである。

盲動鈴とは、視覚障がい者を安全に建物の入り口等に誘導するための音声誘導装置のことで、高低の2音を組み合わせた電子チャイムが一般的であったが、調べてみると、いまでは鳥の鳴き声が多くなっている印象を受けた。記事を見た後、都営三田線や新宿線の駅ホームに降り立った際、どのような盲動鈴が採用されているのかを確かめてみると鳥の鳴き声であった。その場所で立ち止まり、目を瞑って耳を澄ましてみても、電車が往来したり、降車する人々のうごめく音などにかき消されてしっかりと聞こえなかった。

また、北海道札幌視覚支援学校の周りを歩いてみた。この学校の所在地は閑静な住宅地である。私が北海道に帰ってきてから行啓通り沿いに建築された高層マンションもいくつかあるものの、同学校の周辺は長く同所に居住している住宅が多いと思われる。もちろん、大型トラックが往来するとか工場などの音が聞こえるということもないし、そこに住む多くの住民は同学校が建築される前からそこに居住しており、同学校が建築された後に新たに居住してきた方々は少ないと思われる。従って、自ら長年居住する地域に北海道札幌視覚支援学校ができて、朝から夕方まで「ピンポーン」という機械音が鳴り続けていれば、居住者の中から、「頭が痛い」とか「子どもが寝付けない」との苦情が起きることはあり得ることなのかもしれない。従って、付近住民の理解を得るためには、盲動鈴を鳴らす時間帯や音の種類などについて理解を得ながら調整することは必要であろう。しかし、一つ忘れてはならない視点は、いずれにしても、視覚障がいを持つ幼児児童生徒が安心して学校に行き着く環境を維持することが大前提であって、変更することで生じる不安感はできる限り少なくすることである。盲動鈴の音が小さければどちらに向かえばいいのか迷ってしまう。鳥の音と「ピンポーン」という機械音とを比較すると、明らかに機械音が視覚障がい者に対し、「こっちだよ」と手招きしているような音に聞こえた。

出生してまもなく視覚に何らかの障がいがあることが分かり、その後、少しずつ大きくなるにつれて引きこもりがちになった我が子が、盲学校に入学するとのびのびと成長していく姿を見てほほえむ両親の姿や、地域の小学校に入学してから視覚に何らかの障がいがあることが分かり、学校内にて日に日に「お客さん」として扱われていく我が子の本当の居場所を探して盲学校にたどり着き、成長していく子どもの姿を見守る両親の姿などが北海道札幌盲学校ホームページの「保護者の方からの声」に掲載されている。幼い頃から同学校に通学する幼児児童生徒は、「諦めという名の鎖を身をよじってほどいて」ゆき、「冷たい水の中をふるえながらのぼっていく」魚たち（中島みゆき「ファイト」から引用）なのである。

彼らに対し、どのように手をさしのべることができるのかを地域社会や学校にて具体的に学んでこなかった私たちこそ、目を瞑って数歩歩いて考えてみたらどうか。